

志摩市離島における地域コミュニティの閉じ方「しまの終活」

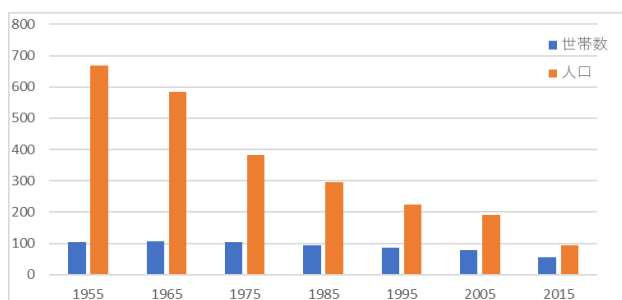
東 大史（三重大学地域人材教育開発機構）

Keyword：三重県、地域コミュニティ、むらおさめ、終活、過疎高齢化

【問題・目的・背景】

志摩市の英虞湾に浮かぶ間崎島は、真珠養殖で栄えピーク時には100世帯668人（1955年）の人口を数えたが、現在は49世帯81人（2017年）^[1]まで減少している。高齢化率は70%台後半に達している。

	1955	1965	1975	1985	1995	2005	2015
世帯数	105	107	105	95	85	78	56
人口	668	585	383	296	225	192	95

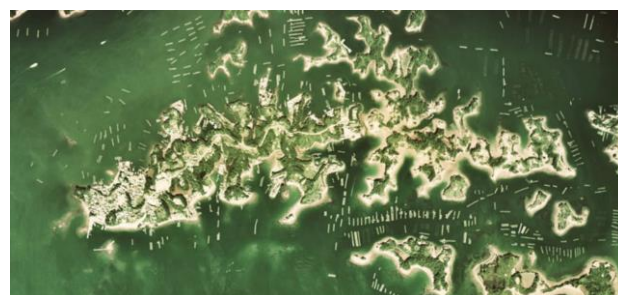


間崎島の世帯数・人口推移 (国勢調査)

間崎島の主要産業は真珠養殖およびイワシを中心とした漁業であり、室町時代の1532年に4世帯が入植^[2]して以降、伊勢湾から熊野灘にかけての漁労生活で生計を立てていたと考えられる。イワシ漁については、カツオ一本釣りの餌として東紀州地域など広域での交易が認められる。また、これら漁労生活から得た収入により本土の鵜方浜や和具に農地を借り、稲作を行っていた記録も残っている。

明治時代の1893年に対岸にある多徳島で御木本幸吉が真珠養殖に成功したことを受け、間崎島でも真珠養殖が開始される。戦後ピーク時には世帯数100軒を超え、1950年代にラジオ・テレビ・電話の普及率日本一、伊勢税務署管内の長者番付トップ10を独占するといった伝説が語り継がれている。実際に島内には老朽化しているものの立派な建物が多く、島民出資で本土側と橋をかける計画もあった（観光客が押し寄せるとして反対多数で否決された）。

真珠養殖自体は1970年代から需要が低下していったが、高度成長期には本土側に持っていた農地を手放して観光開発に活用するといった新たな需要が生まれ、間崎島においても観光業に進出する動きがあった。最盛期には島内に20軒の宿泊施設が営業しており、約35,000人の観光客が訪れた。現在ではすべての宿泊施設が廃業している。



間崎島（英虞湾）空撮（1975 国土地理院）

今回、三重大学および鈴鹿医療科学大学の学生を対象に間崎島でのフィールドワークを実施し、認知症や健康福祉、QOLに関する島民調査を実施するものとする。またそれに伴い、島民が保有する写真のデジタルアーカイブや、歴史文化の聞き書き等、島民の尊厳を守りつつ地域コミュニティをいかに閉じていくかという議論を進める。

前述の通り、産業構造の変化によって人口の急激な増加と減少を経験した間崎島では、島を元通りにするような地域活性化やしまおこしといった活動は求められていない。むしろ、学生のような次世代を担う若者に対して、活性化や地方創生といったカンフル剤的に外部からの関与と補助金投入を進める取組みとは一線を画す、無住化・集落の解体といった“むらおさめ”に向けたフレームワークを提供する現場として、島民とのコミュニケーションを通じて不安を解消しながら日々を規則正しく生活する生き様を感じ取る機会としたい。

この報告は、三重大学のような地方高等教育機関が中立的立場で限界集落に関わり、学生たちに集落点検やインタビュー調査を通じた幸福感やQOLといった質的充足の考え方を学ばせることで、主に経済的・量的観点での活性化だけではない選択肢を考えてもらうものである。同様の事情を抱える高等教育機関や地域に対して考え方の幅を広げる機会となれば幸いである。

[1] 志摩市住民基本台帳より抜粋。住民票を置く住民は多いが、実際に島内に定住しているのは37世帯50人前後（2019年現在）とみられる。

[2] 間崎ものがたり 2005 著者不明、間崎島の島史をまとめたものであり、成り立ちについては「三蔵寺世代相傳系譜」に記録が残っているとされる。

【研究方法・研究内容】

島民を対象とした調査として、集落点検とインタビュー調査を実施する。集落点検はT型集落点検（徳野ら）の手法を離島にアレンジし、行政的な統計情報のみならず本土側や近隣市町で暮らす血縁者の状況についても調査している。また離島に特有の条件として、船の所有と本土側で保有する移動手段についても調査している。

[集落点検]

間崎島総合開発センター（集会所）に集まってもらい、島民と学生と一緒にワークショップを実施する。集落の地図を印刷した模造紙を使い、島民に各戸の現在の状況、持ち主、血縁者の居所などの情報をヒアリングし書き込んでいく。また過去の写真やエピソードなどを地図上に書き出し、間崎島の繁栄の歴史を明らかにしていく。学生はヒアリングした内容を元に、5年後、10年後の予測を行い、現在は居住しているが近い将来は無住化する可能性の高い家を特定していく。

[インタビュー調査]

①日常生活における興味や関心事

事前調査^[3]を元に恒常的な活動、趣味娯楽を聞き取り調査する。回答項目としては以下の通りとなっている。家庭菜園/農作業、真珠養殖/漁業、テレビ（韓流ドラマ・健康番組・ニュース等）、散歩・近所の手伝い、読書、カラオケ、パチンコ、囲碁将棋、裁縫洋裁、パソコン

②友人知人・近隣者・家族親族との関係

主に単身高齢世帯に対して、人間関係の濃淡に関する調査を行う。回答項目としては以下の通りとなっている。頻繁に会っている、継続的に連絡を取っている、挨拶する程度、周囲・家族親族との関係が希薄

③移動・買い物について

間崎島には商業店舗は存在せず、定期的に開かれる買い物支援イベントや、1時間おきに発着する定期船を利用した本土側への行き来に依存している。一方で船の所有、本土側での交通手段などによって移動が制限されることもあり、不便さを感じるか否かがQOLにおいて重要である。回答項目としては以下の通りとなっている。本土側に移動手段を持っている、港からタクシー利用、港から徒歩、港から家族親族の送迎、家族が運搬・配送、

通販を利用

④世帯内における健康や経済上の不安について

間崎島には医師は常駐しておらず、志摩市民病院の医師・看護師が定期的に通診するといった形で、救急時には消防団所有の船によって対岸に運ぶこととなっている。慢性的な疾患を抱えている高齢者もおり、重篤化すると本土側の家族宅や高齢者施設に転居するといったケースも散見され、健康状態の不安解消ニーズは大きい。

また大半が国民年金加入者の間崎島においては、日常的な支出は多くないとはいえ、いざとなった際の経済的な不安や、過去の事業の借金返済や老朽化した家屋の補修などが十分にできていない苦しい状況もある。回答項目としては以下の通りとなっている。

健康上の不安がある/ない、経済状況は余裕がある、どちらかと言えば余裕がある、どちらも言えない、どちらかと言えば苦しい、苦しい



間崎島フィールドワークの様子



立派な家が多いが空き家が目立つ

[3] 志摩市・志摩市社会福祉協議会・三重大学人文学部深井研究室による「間崎島全戸調査」（2018.9）によって、島民の生活実態に関する聞き取り調査が実施されている。本調査に基づき、買い物支援や生活支援拠点「もやい」の運営を進めている。

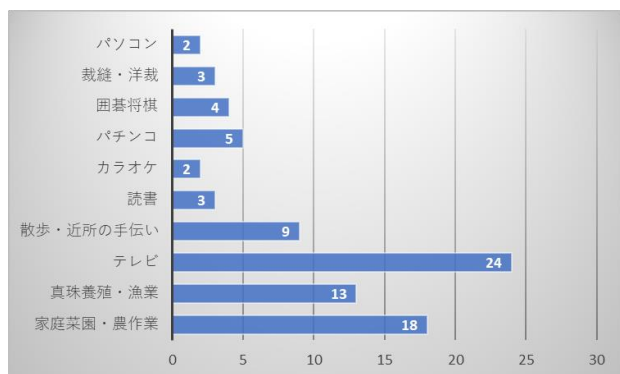
志摩市離島における地域コミュニティの閉じ方「しまの終活」

【研究・調査・分析結果】

調査結果については、プライバシーに関わる内容を含むために個別回答については公表できないが、全般的な傾向としては認知症や健康に対する不安が起こった場合には、島外に居住する血縁者のところに転居するといった動きがみられた。

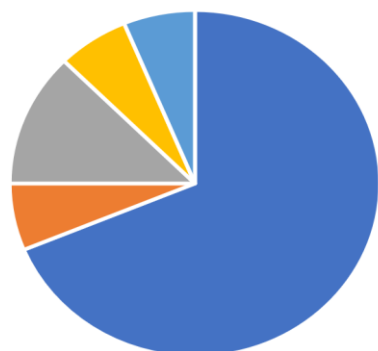
①日常生活における興味や関心事

半数以上(54.5%)が農作業や漁業などの恒常活動を継続しており、ピーク時に比べて金銭的対価は減っているものの、依然として自給的な生業が行われている。また余暇活動においてはテレビ視聴が多く、近隣者の影響から韓流ドラマを観る、健康や料理番組を好むといった傾向がみられた。他にも読書やパチンコ、囲碁将棋など多岐に渡る趣味が関心事として挙げられ、規則正しく文化的な生活を送る世帯が多いと考えられる。



一方で運動設備やスポーツ競技をするような広場が島内には存在せず、島民たちは自給的な生業や散歩、近所の手伝いといった活動を通じて健康を維持している。

②友人・知人・近隣者・家族親族との関係



- 定期的に会っている
- 連絡は頻繁に取っている
- 会えば話をする
- あまり付き合いがない
- 不明

大半の島民が近隣者や別居家族と頻繁にコミュニケーションを取っており、自助(家族親族の支え)・共助(友人知人近隣者の支え)は強い地域であると考えられる。高齢の親を心配した家族親族が頻繁に島を訪れている世帯も多く、近隣者との関係性では比較的若い世代(60代)が積極的に見守り訪問するといった取り組みもみられる。

一方でごく少数であるが、家族親族や近隣者から孤立している世帯も見受けられ、そのすべてが男性単身世帯であった。自治会を中心に交流を持つように働きかけているが、あまり積極的に関わりを持たない傾向にある。

③移動・買い物について

自家用船を保有する世帯は14、ない世帯は19と過半数が船を持っておらず、定期船や近隣者に同乗する形で本土側に定期的に移動している。本土側に定期的に買い物に行く29世帯のうち、移動手段(車・バイク・自転車)を置いているのは7世帯、タクシー等を利用するのが6世帯、家族親族に送迎してもらうのが7世帯といった順番となっている。比較的自由度の高い移動が行われているが、定期船の最終便が17時台と制約条件になっている面も指摘されている。



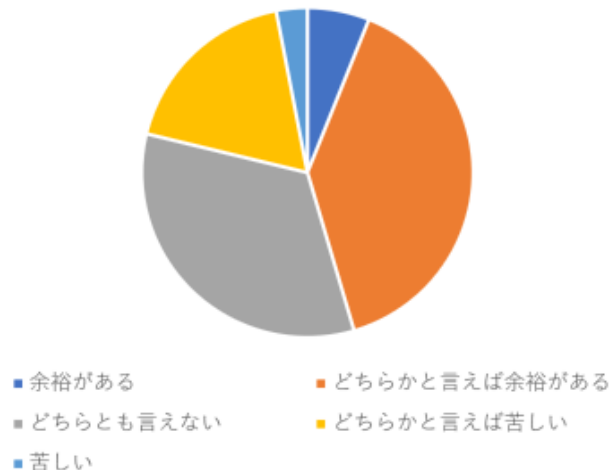
- 本土側に移動手段を保有
- 港からタクシー利用
- 港から徒歩
- 港から家族親族の送迎
- 不明
- 通販利用

④世帯内における健康や経済上の不安について

世帯内において家族が健康不安を抱えているのは13世帯と少なく感じるが、実際にはほぼ全員が高血圧や足腰の痛みなど慢性症状を抱えており、日常生活に支障がない範囲という意味合いで回答している。一方で救急医療体制に不安を持つ世帯も多く、荒天時には救急船が運行できないのではないかと不安視する声もあった。

志摩市離島における地域コミュニティの閉じ方「しまの終活」

経済状況については、余裕がある/どちらかと言えば余裕があると答えた世帯が15世帯(45.5%)と、全国平均に比べても低い。どちらかと言えば苦しい/苦しいと答えた数も7世帯あり、農作業や漁労といった生業ができなくなると収入が途絶えるといった面がみられた。また、老朽家屋の相続・処分や、病気や介護になった場合の入院代や高齢者施設入居費用といった部分を心配する声もあり、近い将来の漠然とした不安を抱えている傾向がある。



【考察・今後の展開】

間崎島の現状は、離島という特性から家族親族による自助、近隣者・友人知人による共助の強い連帯がみられ、地域コミュニティを支えている関係性が浮かび上がる。一方で行政支援や医療福祉に関する公助は弱く、救急や災害時に対する漠然とした不安が島民の暮らしに影を落としていることが伺い知れた。

島民からは地域活性化やしまおこしが求められていない状況であるが、英虞湾を望むロケーションは外資を含む観光事業者が近年数多く進出しているエリアであり、間崎島においてもいくつか再開発の話題が出始めている。最近では東京から直接ヘリコプターで間崎島にアクセスするような、高級料亭が島内にできたことが話題となっており、これら観光事業と救急災害救援体制が連携することによって島民にもメリットがあるのではないかと。

また、このロケーションを気に入って移住した若年世帯が複数あり、観光事業は主たる雇用先となっている。島内の空き家や廃墟となった店舗などを再活用したいという声は多い。所有権が明確な建物は多く、また今後居住利用することはない世帯が大半であるため、売買交渉は比較的スムーズに進められている印象を受けた。

一方で移住した若年世帯の特徴として、島と本土側の鵜方や大王など両方に家を保有しているケースが多い。間崎島内には学校も病院もなく、日常生活は本土側で送りつつ別荘のような形で週末や夏季に滞在するといったニーズがみられ、定住者として扱うべきかは分からない。

この真珠養殖等で繁栄した記憶を持つ旧住民と、これから観光事業を中心に再開発を進めたい新住民の利害は対立しているように見えるが、高齢定住者を中心とした地域コミュニティはゆるやかに閉じていくような状況となっている。旧住民の生活不安を解消する形で新住民が協力し、船での移動や買い物代行、救急医療体制の確立といった取組みを進めることで、新住民の多様なライフスタイルを受け入れる素地はできていると考えられる。

本調査においても、新住民である移住者の協力の下、学生や外部者が関わりながら旧住民にプライベートを含めたヒアリング調査ができた経緯があり、新住民や外部者に対する抵抗感は少ない。今後は英虞湾エコツーリズムとインバウンド観光客誘致などの経済活動が行われつつ、外部からの関与者が主体になるのか、島としての存続は多様性を秘めた形で推移している。

このフィールドワークに参加した学生は医療系が多く、将来は医師や看護師として高齢者福祉に従事する者も出てくると思われる。自宅や住み慣れた土地で最期を迎えたいという個人の願望と、それを可能とする近隣者の地域コミュニティの存続、あるいは頻繁に行き来できる範囲に居住する家族親族の存在といった多面的な要素が幸福感やQOLに影響を与えている事実を理解して自らのキャリアに活かしていく考えを持ってもらいたい。

【参考文献】

徳野貞雄ほか「暮らしの視点からの地方再生」

九州大学出版会 2015年

石田易司ほか「限界集落の高齢者のいきがいと介護」

桃山学院大学総合研究所紀要第39巻1号 2014年